



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレター 第321号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第321号. 京大東アジアセンターニューズレター 2010, 321

ISSUE DATE:

2010-06-14

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/120948>

RIGHT:

(旧・「京大上海センターニュースレター」)

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

2010 年 6 月 14 日

目次

- 東アジアセンター協力会総会のご案内
- 京都大学東アジア経済研究センター 主催シンポジウム
「東南アジア市場で競合する中国と日本」
- 「中国経済研究会」のお知らせ
- 京都大学・アモイ大学共同セミナー「日中の企業経営のチャンスと教訓」
- 外部研究会案内：(社)大阪能率協会アジア・中国事業支援室 6 月例会のご案内
- 国境の外の「少数民族問題」
- カシュガル近況
- 【中国経済最新統計】(試行版)

会員各位

2010 年 5 月 24 日

東アジアセンター協力会総会のご案内

東アジアセンター協力会会長
森瀬正博

私ども京都大学経済学研究科東アジアセンター協力会に日頃から格別なご高配を賜り心よりお礼申し上げます。

さて、7 月 12 日(月)に第 7 回総会を開催することとなりました。別紙のように大変魅力あるシンポジウムと合わせて開催いたします。万障繰り合わせの上、是非ともご出席いただきますよう、心よりお願い申し上げます。

なお、シンポジウム終了後は例年どおり京都大学経済学研究科 2 階大会議室にて懇親会(参加費無料)を予定しております。こちらにも是非ご出席下さい。

記

日時 2010 年 7 月 12 日(月) 午後 1 時～1 時 45 分

会場 京都大学経済学研究科(法経東館)2 階大会議室

以上

京都大学東アジア経済研究センター 主催

シンポジウム

東南アジア市場で競合する中国と日本

共催 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター

後援：京都大学東アジア経済研究センター協力会

2010 年 7 月 12 日(月) 14 時
京都大学百周年時計台記念館国際交流ホール

司会 京都大学大学院経済学研究科教授 塩地 洋

14:00-14:15

挨拶 京都大学大学院経済学研究科長 田中秀夫

14:20-15:00

日本貿易振興機構(JETRO) 海外調査部長 高橋 俊樹 アジア新興国に於ける日本企業の市場戦略

15:00-15:40

トヨタ自動車 藤井 真治 永遠に期待される国から、本当に期待される国へ
(元トヨタ・アストラモーター 副社長) —インドネシアの自動車市場の展望—

15:50-16:30

タマサート大学 講師 ソーポン・チタサッチャー タイにおける中国と日本の企業と製品

16:30-17:10

京都大学大学院経済学研究科 教授 大西 広 ラオスにおける中国商人の活動と摩擦

17:10

閉会挨拶 京都大学東アジアセンター協力会会長 森瀬正博

17:30-19:00

懇親会 法経総合研究棟 2 階大会議室

司会 京都大学東アジア経済研究センター協力会 宇野輝

開会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター・センター長 劉 徳強

閉会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター協力会 副会長 大森経徳

「中国経済研究会」のお知らせ

2010 年度第 3 回目（通算第 10 回目）の中国経済研究会は下記の要領で開催されますので、大勢のご参加を心待ちにしています。

記

時 間： 2010 年 6 月 15 日(火) 16:30-18:00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館 3 階第 3 教室

報告者： 大西広（京都大学経済学研究科教授）

テーマ： 「農奴解放前チベット農奴制の生産関数推定による農奴解放効果の研究」

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第 3 火曜日に行います。2010 年度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期： 4 月 20 日(火)、5 月 18 日(火)、**6 月 15 日(火)**、7 月 20 日(火)

後期： 10 月 19 日(火)、11 月 16 日(火)、12 月 21 日(火)、1 月 18 日(火)

(この件に関するお問い合わせは劉徳強(liu@econ.kyoto-u.ac.jp)までお願いします。なお、6 月 15 日夜に、学長主催の留学生懇親会があるため、いつも行われている有志による懇親会は行いません。)

=====

【予告】

第 11 回 中国経済研究会

時 間： 2010 年 7 月 20 日(火) 16:30-18:00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館 3 階第 3 教室

報告者： 中川涼司（立命館大学国際関係学部教授）

テーマ： 「中国 IT 企業家の社会的形成モデル—サクセニアン・モデルの妥当性—」

=====

京都大学・アモイ大学共同セミナー

「日中の企業経営のチャンスと教訓」

日時 2010年6月17日(木) 13:00-17:00

会場 京都大学経済学研究科大会議室

主催 京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター、厦門大学管理学院

開会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター・センター長 劉 徳強

沈 芸峰 厦門大学管理学院院長、教授
「海西経済の発展状況及びそのチャンス」

塩地 洋 京都大学経済学研究科教授、東アジア経済研究センター・副センター長
「トヨタ生産方式と継続的改善活動」

朱 平輝 厦門大学管理学院准教授
「中国企業の多国間オペレーティングモデル」

大西 広 京都大学経済学研究科教授
「戦後日本企業経営者とマルクス経済学」

閉会挨拶 沈 芸峰 厦門大学管理学院院長

参加費 無料

会議後、短い懇親会を開催します。参加希望の方は一週間前に大西までご連絡ください。

外部研究会案内

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室 6月例会のご案内

当東アジアセンター協力会の法人会員である(社)大阪能率協会アジア・中国事業支援室より6月例会のご案内が来ていますので掲載させていただきます。

当東アジアセンター協力会の大森経徳副会長が副会長として力を入れておられる例会であり、今回は、初めて外務省の中国経済関係の責任者である小川正史日中経済室長にわざわざ東京よりご来阪、ご講演頂くもので、当協力会会員の皆様にもご自由にご参加頂ける会ですのでご希望の方は、6月17日(木)までにお申込み下さい。(申込先:大阪能率協会事務局 E-mail: oma@crux.ocn.ne.jp 又は FAX: 06-6947-4369) (編集者)

アジア・中国事業支援室の6月例会を下記により開催しますのでご案内申し上げます。今回は講師として、外務省アジア大洋州局 小川正史氏をお招きして、お話し頂きます。是非皆様のご参加を頂きます様お待ち申し上げます。

記

日時 : 2010年6月18日(金) 14:00~16:30

場所 : 大阪産業創造館 5階AB室(地下鉄堺筋本町駅下車、本町通り東へ徒歩5分)
大阪市中央区本町1-4-5 TEL: 06-6264-9888
URL: <http://www.sansokan.jp/map/>

内容:

(1) アジア・中国関連講演会

演題: 「中国経済情勢と今後の日中関係」

講師: 小川 正史氏 外務省アジア大洋州局中国経済室 室長

質疑応答: 演題を含め中国ビジネス全般について

会費: 会員 1,000 円、会員外 1,500 円

(2) アジア・中国事業支援室からの報告・連絡事項等

なお例会終了後、懇親会を開催しますので、ご都合のつく方はご参加頂きますようご案内申し上げます。次回例会は7月16日(金)に 立命館大学経済学部教授 松野周治氏をお招きして「中国東北三省の経済情勢と図們江開発の最新情報」と題して、大阪産業創造館で開催予定です。併せてよろしくお願い致します。

国境の外の「少数民族問題」

-ラオス境内中国ボーダーの中国の経済進出に関わる諸問題-

京都大学経済学研究科教授 大西 広

私は以前 2 度ラオスに調査に入ったことがあるが、この五月連休に三度目の調査を行なった。一度目は 2008 年 8 月の南部サワナキット・クロン間の「東西回廊」地区の視察、二度目は 2009 年・2010 年の年末年始のボーテン・フェイサイ間の「南北回廊」地区の視察、そして今回はムアンサイ、ボーテン、ルアンナムタ、ムアンシン地区の調査である。この調査は当初、中国のラオスへの経済進出の調査として単純に考えられていたものであるが、調査の進行とともに、ラオス境内の中国との国境地帯に生じている諸問題が一種の「少数民族問題」であることに気付くこととなった。というのは、これが中国国境の外で起きていることながら、経済活動において強力な中国人(漢族)と弱小なラオス人との間の経済格差が原因で様々な矛盾がこの地で発生し、それが中国少数民族地域で生じている問題と本質的に同じであることに気付いたからである。

それで、現地で実際に見た進出中国人と現地ラオス人との経済的矛盾は以下の 4 種の性質を持つものであった。すなわち、

①「投資者」としての中国人と現地ラオス人との矛盾

具体的には、道路工事のために大量の中国人労働者が入境していること、新規にウドムサイ県で建設されているセメント工場でも中国人が雇われる可能性、中国との国境の町ボーテンのカジノにおいて見たラオス人ガードマンとその中国人雇用者との矛盾である。しかし、こうした労使の対立は外部の者が「期待」するほど一般的なものではなかった。考えてみれば当然のことであるが、途上国が外資を誘致しようとするのは普通のことであり、現地が嫌がっているところに外資が入っているわけでは基本的にはない。また、そこで雇用されている現地の労働者はその雇用により収入が高くなっているからである。

②商人としての中国人と現地ラオス人との矛盾

具体的には中国人商人が現地ラオス人商人の市場を荒らしていること、また現地の農産物供給者の契約争いを巡る矛盾、多くの中国人トレーダーが非合法で事業をしていることへの不満、新しく建設中のショッピング・センターが中国人商人に占められてしまうことへの恐れ、現地タクシー業者と中国人経営ホテルの自前の送迎サービスとの矛盾などである。

③商品作物の委託生産に関わる矛盾

これは現地で生産された農産物を生産する現地農民とそれを集めて中国に輸出する中国人商人の間の矛盾であり、訪問したウドムサイ県のタバコ生産農民から中国人の買付け商人に対する不満が述べられた。彼らが言うには、中国商人がタバコを買い付けに来た際、当初に約束した価格より安い価格でしか買取りをしてくれなかったという。また、買い上げによるお金の支払いが遅れたことへの不満や化学肥料や技術指導料の支払いを求められることへの不満などもあった。こうした問題は一般的なものであり、現在より重要な商品作物として重視されているゴムの木栽培ではより明確に示されている。

中国資本に対抗できるラオス企業家の成長

しかし、以上のような各種の矛盾が発生しているとしても、そこにチベットやウイグル地区におけるような厳しさはない。そして、その原因を考えると、たとえばムアンシン地区におけるゴム植林「投資」の 1/4 はラオス人自身によって行なわれているなど、意外と経済的地位をラオス人が確保していることがあるように思われる。

こうした状況下で企業家として成長するラオス人もいる。たとえば、ウドムサイ県のある村では、村に通じる道を作ったということで、村の共有地を与えられ、大規模にゴム園を経営している企業家があった。また、ムアンシンの農家には自動車を持ったり、家を新築している者が多い。ゴム園での成功のおかげと思われる。あるタクシー業者は、10 年前まではハイスクールの教師だったが、タクシー業に転進し、かつ 9 ヘクタールのゴム園経営者として多くの労働者を雇おうとしている。彼の祖父は中国人ということで、そうした人間関係が企業家精神を育成している可能性がある。

さらに、ムアンシンから国境方面に進んだところにある 2 つの寒村でも成長中の企業家を見た。どちらも自家用車を持ち、一方は木材の中国への運搬で儲けている。これらも中国との接触の中で企業家が成長している例である。これらの村は最も国境に近いだけに中国側に親戚や友人が多く、ゴム園への「投資」は殆ど自力でしている。

国境の街ボーテンの問題

ただし、あまりに多くの中国人が進出し、一種の「租界地」化した国境の街ボーテンの問題自体も論じな

いわけにはいかない。ここは、ラオス政府が設定した「特区」として、ここでは殆どの看板は漢語で書かれ、ラオス人を見つけることは難しい。ようやく、3店のレストラン、2店の小商店をラオス人が経営し、他に国境管理員と警官、中国人経営のホテルやカジノの従業員として働く少数のラオス人がいるが、人口の99%は中国人である。大型のビルの建設が進み、綺麗なアパートは既にラオス語の話せない、ないし話す気もなければ必要もない中国人入居者で満ちていた。特に不遜と思ったのは、彼らは腕時計を中国時間に合わせ、中国時間で暮らしていたことである。

また、ここでの大きな問題は、来ている中国人の主要な目的が、カジノと売春となっていることである。もちろん、これら以外にもネットバーなどの健全なものもあるが、カジノも売春も合法化されていて、その結果、売春婦が路上で売春宿の電話番号と自分の番号を書いたカードを配り、道は男性と腕を組んで歩いている彼女らで満ちていた。ただし、「合法」なので、彼女らは税金も支払っているとのことである。

考えたこと

このボータンでは両「民族」の「交錯」が殆どないので、カジノのガードマン、あるいはタクシー運転手から若干の不満が聞かれた程度であったが、事実上の「租界」なので我々外部者から見れば問題は大きい。ここでの現実を両「民族」の良好な交流と理解することはできない。

中国人移民を制御できるかどうかは難しい。ルアンナムタ県の出資計画部門の主任は不法移民をいくら警察が追い返しても翌日にはまた帰ってくると言っていた。これは基本的に中国に余剰人口があり、ラオスに仕事がある限り進行する。ゴム植林の問題は、本来的にゴム植林の余地が圧倒的に残っていることにある。ラオス側がいかに関心を持って「農民の数からしてももうゴム農園はいらない」と言っても、それは山を無益に放置しているだけの帰結となる。そのうちに、中国の自動車需要はさらに何倍にも成長し、よってゴム価格はまだまだ上昇する。その時に山林を現状のままに放置することは難しい。

したがって、唯一の望ましい道は、ラオス人が本来土地持ちであることを有利に活かすことによって、地主や資本家の立場から中国人を働かせるくらいのパワーを持つことである。困難ではあるが、ラオス内でもやり手の企業家が生じつつあることもその意味で大事である。

なお、ここでは集中的に調査を行なったラオス北部、特に中国国境近くの地区での問題を取り上げたが、ラオスの首都ビエンチャンでは、中国商人の進出がさらに大規模で、現地日本人やラオス人知識人から危惧の声を聞いた。一部には、根拠のない嫌中の噂話が広まるほど、すでに大量の中国人がここに定着し市場に大きく入り込んでいる。

このように見た時、全般的に意外と摩擦が少ないことを正確に認識した上で、しかし一部には危惧の声もあることも知らなければならない。そして、これらを全体として見ると、やはり中国の進出で「利益」を受ける人々と「不利益」を受ける人々との間での受け取り方の相違に思われてくる。前者には、契約で利益を受けた農家、雇われた労働者、現地政府関係者がおり、後者には、中国人と競合する商人、良い作物を供給できず買い叩かれたと考える農家、特に利益を得られない知識人が含まれる。

こうして他国への「従属」を「従属」と捉えるかどうかの相違が、その「従属」による利益の有無と関わっているというのは一般的である。考えてみれば、日本における「対米従属」をそう捉えるかどうか、そのような特徴を持っている。沖縄の人々はより強く「不利益」を被っているのである。

カシュガル近況

15. JUN. 10

中小企業家同友会上海倶楽部代表
東アジアセンター外部研究員(協力会理事) 小島正憲

5月下旬、私は新疆ウイグル自治区のカシュガル市に、「ヤルカンドにおけるウイグル族女性の強制連行」と「アトシュ人」の調査のために、上海→ウルムチ→カシュガルと乗り継いで、9か月ぶりに、再度足を運んだ。残念ながらウイグル語の通訳の問題と準備不足のため、その目的を果たすことはできなかった。それでも多くの重要な事態を見聞することができたので、以下に報告をする。ただし初期の目的達成のために、3か月後には十分準備を整えてから、カシュガルへ再々挑戦する予定である。

1, カシュガルからヤルカンドへ。

①なぜ、ヤルカンドへ行くのか。

イリハム・マハムティ氏は、「7・5ウイグル虐殺の真実」(宝島社新書・2010年1月23日発行)の中で、昨年のウルムチ暴動を漢族のウイグル族の虐殺であると主張し、それに至るにはヤルカンドで起きた二つの事件が伏線となっていると書いている。



- ・「実はその時期、東トルキスタンでは一つの事件が大問題になっていました。カシュガル地区のヤルカンドという街で、漢族の小学校の教師がウイグル人の生徒23人に対して性的な暴行を加えていたことで逮捕されていたのです。この犯行は、最後に暴行を受けた女の子が母親に告白して明らかになりました。教師は5月24日に逮捕されましたが、翌6月14日には新疆政府が『教師には精神の異常が見られた』と発表し、教師に実刑を与えるのではなく、中国国内の故郷に送還することを発表します」(P. 22)
- ・「中国政府は2006年から東トルキスタン地域(新疆ウイグル自治区)で“扶貧政策”と称し、15歳から25歳までの未婚の女性を強制的に連行し、4000km以上も離れた中国内地の工場で働かせる、という政策をとっています。“扶貧政策”といえば聞こえは良いですが、なぜか対象は若い独身女性だけでした。こうして故郷から連れ去られ、遠く離れた土地で賃金の安い労働に強制的に従事させられたウイグル人女性は年間8万人、府の計画では2010年までに40万人にもものぼる量を移送するというものでした。(2008年末には、すでに40万人が連れ出された)。なぜ北京政府は若い独身のウイグル人女性だけを選んで故郷から遠く離れた工場に彼女らを送り込んでいるのか。これがウイグルの民族を根絶やしにしようとする彼らの策謀であることは明らかでしょう。40万人もの独身女性が連れ去られてしまったら、それと同じだけの男性が同族の中では配偶者を見つけられなくなることを意味します」(P. 140~141)

私はこの2件を検証し、さらに自分の仮説を証明するために、ヤルカンドに足を運ぶことにしたのである。ちなみに私は前回のカシュガル市疏附県や天津市工業団地の調査で、「ウイグル族女性の強制連行の事実はない」ということを検証しておいた。しかしながらイリハム氏らの「強制連行」説を完全に論破するには、私の仮説を豊富な現地資料で裏打ちする必要があると考えている。なお私の仮説は下記の如くである。

- ・2003年ごろから沿岸部の労働集約型工場では、人手不足現象が起きてきた。
- ・沿岸部の企業は、中国の内陸部に求人基地を作り、人手の確保に奔走した。それはどんどん内陸部に拡大していき、チベット族やウイグル族の地域にまで達した。(現在ではベトナム・ラオス・ミャンマーなどからの外国人ワーカーを採用しているほどである)。
- ・沿岸部の企業にとっては新疆の各地方政府の労務輸出部門に取り入って、そこから派遣を受け入れることがもっとも簡便な方法でもあった。当然そこには癒着が生まれ、金銭の授受が起きていた可能性がある。
- ・新疆の各地方政府では、これが“扶貧政策”を実施する格好のチャンスであるため、積極的に労務輸出を行った。沿岸部企業に、地元送り出し地域へ企業進出を、交換条件とする地方政府もあった。そこでは「強制」という事実実はないが、地方政府の中には「業績と欲」に目がくらんだ幹部が、末端行政組織に「割り当て」を行い、強引に労務輸出を行ったところもあると思う。

- ・沿岸部の労働集約型産業は、繊維、靴、おもちゃなどを中心として女性の職場が多く、そこでウイグル人女性が求められ、それに応じる形でウイグル人男性よりも女性の方が多く派遣された。
- ・ウイグル人女性は漢族にはない独特の美貌を持っており、それが原因で、沿岸部に出たウイグル人女性が、中国の他の地域から来た女性よりも、沿岸部の漢族男性に弄ばれる率が高かったと思われる。
- ・それらの事態にウイグル人男性が怒りを募らせていたと思われ、それが時代錯誤の「強制連行」や「民族根絶やし」という言葉を生み出してしまったと考えられる。
- ・昨年のウルムチ暴動がなくても、ウイグル人は沿岸部に馴染まず、ほとんどが故郷に戻ってしまう傾向にあった。広東省韶關市おもちゃ工場のウイグル人もすべて故郷に戻ってしまった。もし新疆政府に「ウイグル人女性を強制連行して漢族に同化させる」という思惑があったとしても、それは結果としてほぼ失敗しただろう。

※ヤルカンド概況

ヤルカンドは漢語では沙車県と表記されている。カシュガル市から東南へ220kmほどのところにある。南の崑崙山脈、北のタクラマカン砂漠にはさまれた地域で、気候は乾燥しており、日照時間は長い。年平均気温は12.3度、年平均降水量は57mm。人口は62万人。ほぼウイグル人である。2000年あまりの歴史を有し、前漢の時代には沙車国として栄え、16世紀にはヤルカンド・ハン国として偉容を誇った。

②ウイグル人通訳、姿を消す。

カシュガルからヤルカンドへ向かって、国道315号線を10kmほど走ったところに、「烈士陵园」があった。私は、「なぜこんなところに紅軍兵士の墓があるのだろうか」と不思議に思った。かつてこの地で紅軍兵士がウイグル族と戦ったという記録を目にしたことがなかったからである。カシュガルから同行したウイグル人通訳も、この場所に始めてきたという。とにかく門から中に入って見てみると、その記念碑には1959年の対インド戦争で亡くなった兵士約300人を祀ったものであると記してあった。この地から崑崙山脈方面へ1000kmほど行ったところに、インドとの国境があり、その空喀山口という場所で激戦があったという。墓標を読んで行くと、兵士たちは陝西省や河北省などから来ていることがわかった。

そのうちにその墓所の一角にまだ新しい一群のお墓があることに気がついた。そこまで行き、墓碑を読んでみたところ、そこには「1990年4月5日、平息巴仁郷においてウイグル族との戦いにおいて亡くなった御霊を祀る」と書いてあった。つまりこの近くでも民族紛争が起きていたのである。このような墓碑は10以上あった。私はこの衝突があった場所に連れて行って欲しうと通訳に頼んだが、彼はそこを知らないというばかりで、首を縦に振らなかった。仕方ないので地図を広げて見てみると、近くの疏勒県に巴仁郷という場所があった。

私が通訳にそこを指さして、「ここに連れて行け」と強く言っているとき、ちょうど一台の軍用トラックが20人ほどの解放軍兵士を乗せて、墓地に入ってきた。私は彼らもお参りにきたのかと思いながら、しばらくその様子を見ていた。するとかたわらにいたウイグル人通訳が、突然大木の影に隠れてしまった。そのまま通訳は解放軍兵士がその場を離れるまで、20分間ほど姿を現さなかった。やっと出てきたとき、彼の顔はひきつっており、隠れた理由を私に告げもせず、に車に乗り込んでしまった。30分ほど無言のまま走ったところで、通訳はやっと口を開き、「あんな場所で軍人とあつたら、半殺しにされるかもしれない。怖かった」と言った。

この会話で、この臆病な通訳では今回の私の調査はとても無理だと、私は判断した。

③口蹄疫対策。

車に揺られながらウトウトしていると、車が急停車し、通訳が降りてくださいという。外を見ると警察が居る。私たちの車の前では、バスから乗客がぞろぞろ降りている。後ろの乗用車からも、男性が数人降りた。私はてっきり検問だと思ったので、車を降りて前のバスの一団について歩いて行った。ところが警察は立っているだけで、特別、何もしなかった。車から降りた多くの人たちも、何もしないでとにかく道路脇を前の方へ進んで行くだけであった。そのうち地面に石灰が一杯撒いてある場所を通らされ、次になにかの液体が染み込ませてあるような古い絨毯の上を10mほど、最後にまた石灰の上を歩かされた。私たちの車はどうしているかと思い見てみると、なにかの液体を染み込ませた藁束が10cmほどの厚さに敷き詰められた10mほどの道を、ゆるゆると走っていた。その最後では白衣の男が噴霧器を持って待ち構えており、車の下と、運転手の足下に薬液を噴射していた。

ここまで見て、私はこれが口蹄疫の予防対策だと知った。前回カシュガルに来たときには、このようなことは経験しなかったの、通訳に「いつから始まったのか」と聞いてみると、「どうも2〜3か月前らしい」という返事だった。カシュガルからヤルカンドまでの間、このような「口蹄疫予防検問所」が4か所もあった。おかげで靴がかなり汚くなってしまった。



④ナイフの特産品。

カシュガルとヤルカンドのほぼ中間地点に、英吉沙という街があり、その特産品はナイフだという。道路の両側にはずらりとナイフ販売店が並んでおり、中には実演販売をしているような店もあった。私はそのうちの1軒に入って、特産品のナイフを見てみた。たしかによく切れそうなナイフがたくさん陳列してあった。値段は100元～800元ほどだった。中には同型のものが大中小とそろっており、親子3代の男性が持つという立派なものもあった。それらを値踏みしながら、ふと私は、「なぜこの街ではナイフが特産品なのだろうか」と思った。店員に聞いてみると、500年ほど前、この地方でイスラム教徒と、和田（ホータン）の方の仏教徒が戦ったとき、この地でイスラム教徒が武器として刀を作ったので、その伝統がナイフ作りとして残っているのだという。しかし他の店で同じ質問をしてみると、そこの店員は「昔、このナイフは羊などの皮を剥ぐのに使われていました。その名残で現在では護身用や飾り物として使われています」との答えが返ってきた。私にはどうもこの店員の答えの方が正しいのではないかと思えた。



いずれにせよ遊牧民は、このナイフ1本で羊の皮を剥ぎ、食事時に使い、時には武器にも使ったのであろう。それが現在、伝統的工芸物としてこの地に存続したのだと考えられる。最後に私は英吉沙と刻印の入った300元のナイフを買った。

⑤ヤルカンド市内。

ヤルカンド市内には警察の姿が少なく、緊張感は少なかった。市内に入るのにも警察の検問はまったくなかった。この点はチベット暴動1年後の周辺都市が、市内へ入る道路を武装警察によって完全に封鎖され、厳しい検問があったのと比べると、雲泥の差であった。市内中心部に入って、いつもの暴動調査のときの要領で、小売店や飲食店での聞き込み調査を始めようとしたが、通訳がまったく指示通り動かないので閉口した。学校の近くに行ったとき、ちょうど下校時間で親たちが子供の出迎えに来ていたので、上記の事件があったかどうかを通訳に聞かせたが、とんちんかんな答えしか返ってこなかった。どうも通訳がごまかして関係のないことを聞いているような気がした。ウイグル人たちも漢族に似ている私の顔を、いぶかしげに見るので、それ以上の追及はやめた。ただし学校の門前には、「私たちの学校は上級機関の指導を歓迎する」という漢語の横断幕が掲げられていた。他の都市では見かけない横断幕だったので、数か所の他の学校にも行って調べてみたが、そこにも同様の横断幕が掲げられていた。しかしこの横断幕と上記の事件の関係の有無については調べようがなかった。



市内には求人広告が多かった。ことに市中心部に新しくできた商店街には、具体的な待遇まで明記した求人広告がデカデカと出ていた。給与は600元（手当別支給、社保・衣食住会社持ち）から1000元というのが相場であった。他の場所でもだいたい3軒に1軒の割合で、店頭で求人広告が貼ってあった。たまたま入った喫茶店にも、野外の大きな木の幹にウイグル語で従業員募集という貼り紙がしてあった。ヤルカンドでもいたるところで、ビルやマンションの建設ラッシュが見られ、経済は超活性化している様子であり、周辺の村の若年労働者を、それらがすべて吸収し尽くしてしまっているのではないかと思わせるほどであった。

⑥ヤルカンド・ハン国の陵墓。

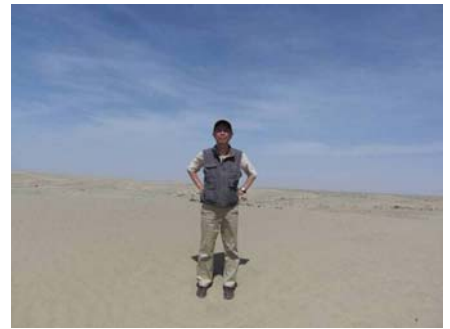
市内の中心部に、16世紀にこの地で栄えたヤルカンド・ハン国の陵墓があり、王宮跡やモスクがあった。この王国はカシュガルのアバ・ホジャに滅ばされたという。ここに祀られているアマニサ・ハン王妃は、この地方の舞曲を集大成し、音曲「十二木卡姆」を作り上げたことで有名である。

⑦タクラマカン砂漠の入り口＝喀拉蘇。

ヤルカンドからさらに50kmほど東南に走ったところに、喀拉蘇（カラソ）という街があり、そこから東へタクラマカン砂漠が広がっているという。往復2時間ほどかかるということだったが、せっかくここまで来たのだから、タクラマカン砂漠を一目見ようと思い、行ってみることにした。道中の村は質素な住居が多かったが、砂漠の近くだというのに意外に緑に覆われているところが多かった。視界にはすでに雪山の姿はなく、さりとてカレーズのようなものが作られている様子はない。水はどこから来ているのだろうかと思い、窓外を見続けていると、地下水をポンプで汲み上げている場所をみつけた。そこではきれいな地下水が大量にあふれ出しており、そこから畑地まで溝が掘られ、水が送り込まれていた。そのような汲み上げポンプは道路沿いに、約500mおきに設置されていた。



タクラマカン砂漠の入り口と称される場所には、10mほどの高さの木製の物見台が作ってあった。今にも倒れそうであったが、上がってみると、そこには広大なタクラマカン砂漠が広がっており、壮観だった。その光景にしばらく見惚れていたが、暑くて体がひからびてしまいそうだったので、そこは適当に引き上げた。帰路、喀拉蘇県の街中で、偶然に労務輸出事務所の看板をみつけたので入ってみた。そこでは事務員が一人ひまそうにしているだけで、事務所内は閑散としていた。事務員に通訳を通してウイグル語で、「私はこの村で縫製工場を稼働させたい。600人ほどの若い女性の採用は可能か」と聞いてみた。すると「この村には若い女性はいない。みんなヤルカンドやカシュガルに出て行ってしまっている」との答えが返ってきた。やりとりはウイグル語なので、その真偽を確かめることはできなかったが、その事務員がいかにも面倒くさそうな態度を示すし、通訳がその場を早く離れたいという素振りを見せるので、私もそれ以上の探索はできなかった。



2. カシュガルからアトシュへ。

①なぜアトシュへ行くのか。

先日私は、ウズベキスタンの首都タシケントで、「ウイグル族の間でも商売の上手いのは、“アトシュ人”である」という話を聞いた。この話は初耳であったので、ぜひアトシュへ行き、その真偽を確かめてみたかった。幸い、アトシュ(阿図什)は、カシュガルの近くであったので、ヤルカンド調査と兼ねてその地に出向くことにしたのである。

※アトシュ概況

アトシュ市はカシュガルの北方35kmに位置している。人口は20万人であり、住民の80%がウイグル族。漢時代には疏勒国に、隋時代には突厥に治められていたが、唐時代に入って漢族の支配下になった。古代のシルクロードの要衝であり、現在に至っても依然として貿易が盛んな地域である。なおアトシュをアルトゥシュと表記する場合もある。

②アトシュ市内。

地図上ではカシュガルとアトシュはわずか50kmしか離れておらず、隣町という感じである。ところが実際に行ってみると、カシュガルとアトシュの間には高い山と河があり、両市はそれらで一線を画されている。同じウイグル族でもカシュガル人とアトシュ人は、山を貫いて道路ができるまではあまり交流がなかったようである。通訳が、「アトシュ人はたしかに昔から商売上手と言われており、多くの人が中央アジアを含めて世界中に散らばっている。それに比べてカシュガル人はカシュガル近辺から出たがらない人が多く、内向的である。市内を調べればその証拠がなにか出てくるだろう」と話してくれたので、アトシュ市内を車で巡回した。

するとある商店街の入り口に、「民族団結は金」という横断幕が掲げられていた。私はそれを見て、まさに商売人の街らしい標語だと感心した。しかしながらバザールにも、博物館にも図書館にも、そこには「アトシュ人の商売上手」を裏付ける証拠は見つけ出せなかった。残念だったが、それ以上手の打ちようがなかったので、アトシュ周辺の文化遺産の調査に切り替えることにした。なお通訳の話によれば、カシュガル市内のビルはアトシュ人所有の物が多いという。

③サトク・ブハラ汗陵墓。

アトシュ市の西南2kmほどの地点に、サトク・ブカラ汗という名の王の陵墓があった。この王はカラハン王朝で最初にイスラム教に帰依し、それを国教にし、915～955年まで40年間在位していたという。この陵墓は新疆地域に現存する最古のものであり、しっかり保存されていた。この陵墓がアトシュにあることから、かつてこの地が新疆地域のイスラム教の中心であった可能性が高いと思われる。

④二つの仏教遺跡。



アトシュ西南約14km の地点に、三仙洞という名の仏教遺跡がある。河で削り取られた岩山の中腹に、高さ2m、奥行き2.7mの洞穴が3つ掘られており、中には10体以上の仏像が描かれている。漢代の作といわれ、中国でもっとも西にある仏教遺跡であるという。



アトシュ南約20kmのところに、莫尔仏塔という名の仏教遺跡がある。砂漠の中に二つの塔が建っている。一つは基礎部分が1辺12.3m、高さ8.4mの“舍利子”と呼ばれている塔、もう一つは底辺が25×23.6m、高さが7mほどの寺院跡。ともに唐代のものとなっている。このような仏教遺跡が残っているところから、やはりこの地がかつてはカシュガルより栄えていたことを想像させ、同時にこの地で仏教とイスラム教がせめぎ合っていたことをうかがわせる。

⑤ナチスと戦うウイグル族。

昼食を食べるために入ったレストランで面白い物を見つけた。その壁にはナチス軍と戦っている兵士の絵が掛かっていた。私が「なぜこんな絵が、ここに掛かっているのだろうか」と不思議そうにながめっていると、通訳が「これは第2次大戦にソ連兵として参加し、ナチスと戦ったウイグル族の絵です。戦っているウイグル族の兵士たちが、ラフツ（ウイグル族の民族楽器）を背負っているでしょう」と話してくれた。第2次大戦当時、イリ地方の若者たちはソ連兵として西部戦線で戦ったのだという。したがってウイグル族は、現在でも中国人という意識が少なく、カザフスタン・ウズベキスタン・キルギスタンなどの国の人々との交流が強いのだという。たしかによくよく地図を見てみると、イリ地方はカザフスタンと草原続きで、この地の住民はカザフスタンとの往来には障害がないように思われた。次回にはこの地方に足を運び、この地形を見て、ナチスと戦ったという老兵士を見つけインタビューしてみたいと思う。



《ナチスと戦うウイグル族兵士の絵》

3. カシュガル市内。



①市内の変貌。

9か月ぶりに訪れたカシュガルは大きく変わっていた。たくさんの古民家が壊され、高層ビルの建設ラッシュが始まっていた。すでに完成した高層ビルが数棟、建設途中のものが数棟、平地にされ建設予定地とされている場所が数か所あった。このまま建設が進めば、来年の今頃になると、これらの高層ビル群でカシュガルの風景は一変しているに違いない。たしかに文化遺産であるカシュガル古城は破壊されていないが、エイティガールモスク周辺の古民家は、ほぼ無くなりつつあった。「この古民家の住民はどこに移住させられたのか」と通訳に聞くと、「カシュガル市郊外の3か所に移住している」と言うので、そこまで見に行ってみた。そこには住み良さそうなマンションが林立していたが、通訳の話に寄ればなにかと住民の不満が多いという。市内の高層ビルの建設会社は、カシュガル資本のものが多くという話だったが、当然漢族資本も進出してきているものと思われる。この高層ビル建設ラッシュは、中国政府の4兆元の内需活性化政策が、着実にカシュガルにも浸透してきていることを示していた。なお広東省の深圳市がカシュガル市の経済活性化の後押しをしており、私の泊まったホテルに深圳市が事務所を構えていた。



次に大きく変わっていたのが、求人広告であった。それらの数はほぼ倍増しており、しかも派手になっており、給与などの待遇を具体的に明記したものが多くなっていた。また前回は見かけなかった政府公認のウイグル語だけの求人広告も出回っていた。目抜き通りの漢族商店街では、ほぼ2軒に1軒の割合で店頭求人広告が貼ってあった。求人職種も総経理、店長からワーカー、皿洗いまで多岐にわたっていた。給与は最低が800元(手当別、社保別、飲食住社会社側持ち)で、最高は5000元(同条件)であった。

郊外には、以前にはなかった工場が次々と建てられていた。物流基地という看板を掲げた建物や、原油を備蓄しておくような建築物、太陽光発電研究所と称する工場などが並んでいた。

このような建設ラッシュの結果、カシュガル市経済が沸き立っており、求人広告の激増はいずれも人手不足に陥っていることを示すものだと考えられる。昨年のウルムチ暴動以来、ウイグル族は中国全土から新疆に戻ってきている。しかしながら中国政府の内需活性化政策に後押しされた活況によって、新疆地区では失業者が増加するのではなく、むしろそれらを吸収してもまだ足りないという状況が出現しているようである。

②大動物バザール。

ヤルカンドからカシュガルに帰った日が、ちょうど日曜日であり、市内で大動物バザールが開かれているというので、すぐに見に行った。そこには大勢のウイグル族が、山羊・牛・ロバ・馬など持ち寄り、盛んに売買をしていた。値段は普通の山羊で1000～1200元、牛で8000元ほどだった。この家畜がウイグル族農民の貴重な現金収入となっており、口蹄疫への警戒心の高さも頷けた。

③班超の足跡。

カシュガル市内南部に、班超と36人の部下の彫像が建てられている。班超は後漢の時代に、当時、疏勒国に属していたこの地に遠征しカシュガルとヤルカンドを降し、36人の部下と共に、17年間統治したという。中国政府は、そのときの遺跡がまだわずかに残っているということ口実に、1994年から2年間をかけて、ここに立派な記念碑を作った。当然のことながら、ここに来るのは漢族のみで、ウイグル族はほとんど来ないという。同行のウイグル人通訳もここに来たのは始めてだと話した。

④香妃墓。

カシュガル市内西北部に、アバ・ホジャの陵墓がある。この陵墓はイスラム教のモスクとして1640年から造営されはじめ、その後、礼拝の指導者であり、またこの地の統治者であったアバ・ホジャー族(合計5代72人)が埋葬された。中でも有名なのが、清朝乾隆帝の妃となったイパル汗である。この妃には逸話が残されている。この妃は生まれながらにして体から、香しい沙枣(砂ナツメ)の匂いがただよっており、香妃と呼ばれていたという。アバ・ホジャはこの香妃を乾隆帝に献上し、清朝との和を保とうとした。香妃はやむを得ずその命に従ったが、北京に着いてすぐに服毒自殺をした。嘆き悲しんだ従者たちは棺を車に乗せ、124人が3年かけてカシュガルの地まで運んできたという。現在でも、その棺の運搬に使ったという車が、陵墓内に展示してある。ただし清朝側の記録には、1788年に北京において55歳で病没し、清の東陵に埋葬されたと記してある。近年、中国政府は発掘調査の結果、このことが証明されたと発表している。いずれにせよ現在でもカシュガルの人たちは、香妃服毒自殺説をかたくなに信じており、同時に清朝に降り香妃を献上したアバ・ホジャを嫌っているという。

香妃の体の回りには、彼女の体の芳香に誘われていつも数十匹の蝶々が舞っていたという。陵墓の中庭では蝶々の飾り物が1セット(10匹)＝10円で売られていた。それを漢族女性たちが買い求め、衣服に付けてはしゃぎながら記念写真を撮っていた。ちなみに砂ナツメを食べてみたが、良い匂いもしなかったし、美味しくもなかった。

⑤ユスフ・ハス・ハシフ陵墓。

カシュガル市内南部に、ユスフ・ハス・ハシフ(1019～1085)の陵墓がある。彼は11世紀にこの地で栄えたカラハン王朝時代の哲学者であり同時に文学者でもあった。彼は“福楽智慧”の作者として知られている。この著作は1069年から2年間かけてウイグル文字で書かれ、長編叙事詩の体裁で全編85章からなり、当時の王に献上されたものであるという。陵墓の壁には、その文章の一部分がウイグル語と漢語で彫り込まれていた。

漢語の方を読んで見ると、その中身は“福楽智慧”という名称に反して、「王への治世・処世の献策」というものであった。私はそれが、「インドのカウティリヤの実理論」や「イタリアのマキャベリの君主論」に匹敵するのではないかと思った。なぜならそこには、「英明な君主は能力があり賢明な幹部を任用しなければならない。また賢哲な人材の補佐が必須である。戦時にはいかに軍隊を指揮するか。戦時にはいかなる計略を用いるか」などという項目が並んでいたからである。私はこれをじっくり読み、日本語に翻訳してみたいと思い、事務所に行きウイグル語で書かれた本を欲しいと言った。ところが漢語のものしかないという。仕方がないのでまず漢訳されたものを買ひ、ついで市内の古本屋に探しに行った。そこでやっと埃だらけのウイグル語版を見つけ買い求めた。店の主人が「これはもう手に入らない代物です」と話してくれたので、貴重な骨董品を手に入れた気分であれしかった。

⑥モハマド・カシュガル陵墓。

カシュガル市内から西北へ50kmほど車で走ったところに、モハマド・カシュガル(1008～1105)の陵墓がある。彼もまた11世紀にこの地で栄えたカラハン王朝時代の言語学者である。彼は若き日にトルコまで旅をし、そこで大いに学び、“突厥大辞典”を著し、その後カシュガルに戻った。この著作はウイグル語版百科全書ともよばれており、当時の各分野の最高の知識を網羅しており、現代でも価値が高いという。彼はこの著作を基に、この地で学校を開き、若者たちの教育・啓蒙活動に後半生を捧げたという。私はこの本も日本語に翻訳してみたいと思い、ウイグル語版と漢語版の両方を買ひ求めた。

カラハン王朝時代のカシュガルに、ユスフ・ハス・ハシフとモハマド・カシュガルという著名な二人の学者が活躍していたということは、この時代のカシュガルが繁栄しており、高い文化水準を誇っていたということである。現代に生きる私たちは、その事実やこの文化遺産を、日本を始め世界の多くの人に知ってもらふ必要があると思う。同行のウイグル人通訳も、「自分も勉強してみたい」と言い、そこでウイグル語版の本を買ひ求めていた。

以上

【中国経済最新統計】（試行版）

上海センターは、協力会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることになりましたが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供し、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。 編集者より

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増 加 率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 ^{ドル})	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	8.7	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2008 年												
4 月		15.7	22.0	8.5	25.4	164	21.8	26.8	▲16.7	52.7	16.9	14.7
5 月		16.0	21.6	7.7	25.4	198	28.2	40.7	▲11.0	38.0	18.0	14.9
6 月	10.4	16.0	23.0	7.1	29.5	207	17.2	31.4	▲27.2	14.6	17.3	14.1
7 月		14.7	23.3	6.3	29.2	252	26.7	33.7	▲22.2	38.5	16.3	14.6
8 月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9 月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10 月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11 月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12 月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009 年												
1 月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2 月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3 月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4 月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5 月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6 月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7 月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8 月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6
9 月	8.9	13.9	15.5	▲0.8	(33.4)	129	▲15.2	▲3.5	10.6	18.9	29.3	31.7
10 月		16.1	16.2	▲0.5	(33.1)	240	▲13.8	▲6.4	▲6.2	5.7	29.5	31.7
11 月		19.2	15.8	0.6	(32.1)	191	▲1.2	26.7	10.0	32.0	29.6	34.8
12 月	10.7	18.5	17.5	1.9	(30.5)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010 年												
1 月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3
2 月		(20.7)	(17.9)	2.6	(26.6)	76	45.7	44.7	2.5	1.1	25.5	27.2
3 月	11.9	18.1	18.0	2.4	26.3	▲72	24.2	66.4	28.1	12.1	22.5	21.8
4 月		17.8	18.5	2.8	25.4	17	30.4	50.1	21.3	24.7	21.5	22.0
5 月		16.5	18.7	3.1	25.4	195	48.4	48.9	29.3	27.5	21.0	21.5

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合がありますので注意されたい。また、（ ）内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。
出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。